

8) ビオウヤナギ=未央柳/美容柳

ビオウヤナギはキンシバイと同じくオトギリソウ科の半落葉低木で、1m ぐらいの高さになる。これも中国原産で、わが国には江戸時代の中頃に渡来したと思われるが定かではない。ビオウヤナギの和名の由来は、花が美しく葉が柳に似ているためで、未央柳の語源は中国の『未央宮』に基づくものと思われる。中国名は『金糸桃』(キンシトウ)で、これは黄色の花糸が長く伸び、『桃』のような花が咲くためだといわれているが、おそらく前種が『金糸梅』で『梅』がつくところから、本種を『桃』に見立てて名付けたのだろう。いずれにしてもこのオトギリソウ科の2種はよく似た好対照なのである。また学名は『*Hypericum chinense*』である。

未央宮は漢の長安城、南西の隅にあった。前漢の『高祖』の時代に丞相(ジョウショウウ=天子の職を補佐して、国政に携わった大臣の呼称=宰相のこと)であった蕭何(ショウカ)という人が中心になって築き、恵帝の時から平帝の時まで約200年間にわたって、皇帝が代々常居として用いた。この未央宮には東闕(トウケツ)、北闕(ホクケツ)、前殿(ゼンデン)を初め、宣室殿(センシツデン)、温室殿(オンシツデン)、清涼殿(セイリョウデン)など多数の殿閣と武器庫なども備えていた。因みに『闕』は高くそびえる城門のことで、中央部は道になっていて、上部は物見となっており、軍事的な要素も持った建物である。宣室殿はもとは牢獄などの意味として用いられたが、その後天子の正室の意味に用いられるようになった。しかし前漢末の混乱期に乗じて、自ら新皇帝と称して『新』の国を興した王莽(オウモウ)の時に廃され、後漢が復興すると修復されて、その後も前趙、西魏、唐の代にもたびたび修復されている。東西が2,300m 南北が2,000m の規模を誇ったといわれ、日本の平安京が、東西で240m 南北は312m であったから、平安京の60倍ぐらいの大きさだったことになる。白楽天の『長恨歌』では次のように詠っている。

歸來池苑皆依舊 歸り來たれば池苑(チヱン)皆 舊(すべて昔のまま)に依る
 太液芙蓉未央柳 太液(タイエキ=池の名前)の芙蓉(フヨウ=蓮の花)未央の柳
 芙蓉如面柳如眉 芙蓉は面(オモテ=顔のこと)の如く、柳は眉の如し
 對此如何不淚垂 此に對して如何(イカ)ぞ 涙の垂(タレ)れざらん

これは例の『安祿山・史思明の乱』がおさまった後、玄宗が長安に戻ってくることを詠ったもので、玄宗の気持ちを表現したものである。「帰ってくると邸の庭はもとのままである。／池の美しい蓮の花も宮殿の柳も変わっていない。／しかしそういうものを見るにつけ、蓮の花は美しい楊貴妃の顔を思い出させるし、細い柳の葉を見れば、楊貴妃の眉を思い出さずにいられない。／この景色を目の当りにして、どうして涙を流さずにいられようか。」というほどの意味になるろうか。『未央柳』という名称は、この『長恨歌』からとったものであろう。これも挿し木でよく活着するので、すぐに苗木を作ることができる。



ビオウヤナギの花もキンシバイに似ている。かわいらしい花なのに、この花の名前すら知らない人が多い。漢字で記せば『未央柳』、長恨歌の一節にも詠われている(さいたま市浦和区)。



ビオウヤナギの花、梅雨空のうっとりさを晴らしてくれる(さいたま市浦和区)。

[目次に戻る](#)